

鐵
窓
三
昧

書き置く事(序)

私事、昨年の九月このかたより當監獄の方へ居候替えいたす事と相成り、その後引續いて、むだ飯を食ひ、妄想に耽り、雜書を読み、或は駄句をひねり、歌をのたくるなど、しきりに無爲と繁忙を極め居り候。しかも、小人共は閑居して不ゼンを爲すと雖も、悪人なる私事は閑居して忽ち『譚』をなし、起きては孤座面壁、以つて蛙の如く腹をふくらせて胃病を防ぎ、臥しては碧巖鏡を拈じて眼を疲らすの魔酔薬となし、一意専心、のらくらと模範囚人たらん事に寧日ある次第に御座候。

さて、此處に一筆申残さんと存するは余の儀にも候はず、即ち其砌り、欠伸の折にふれ、思はずも苦吟なして吐き捨て申候ところの俳句奴の儀に御座候。

私事、そのおり／＼に吐き捨て候句層のいろ／＼は、みな／＼娑婆の亡者どもへつかはすヨタ手紙の度びごとに、その埋草としてそれ／＼相當の成佛をいたさせ居り候ひしが、流石に煩惱の犬は追へども去らず、手許へそれ等の影をだに書きとどめ置かざりし事の、今に至つて何んとなく淋しく、且つその佛をそぞろになつかしくさへ覚え來り候。依つてもつて、南無三、我れこそは天晴れ凡夫なりけりと頓悟仕り、びた／＼、額を叩いて四邊りを掻き探し居るうちあゝら不思議や、時に一束の反古の中より忽ち聲あり、「やあ、やあ、愚かや久太、我れ俳奴者之れにあり」といふを打ち見やれば、嬉しや二月このかたの句の姿のみは、ありありとインキに残り居り候ひき。故に、雀籠は窓外の正物に頼み置きて我れは直ちにそれを書き寫し、更らに今後なほ吐き捨て行く筈の俳句奴をも、やはり一々その姿を書きとどめ置かんづものと、そこで監獄覺えの觀世経りをもてちよいと綴ぢ、題して『鐵窓三昧』と名づくるもの、即ち此の是れに御座候。

されば私事、此處に以上の如き、餘りにも平凡にして、おつたまげたる程に哀れ馬鹿々々しき因果因縁のヨタ文をものし、近き内に此の『鐵窓三昧』を引き取り給はる誰人かの爲めに一筆書き残して、以つて、たいくつなる今日の一日か半日かをたわいなく消光し去らんの念願、あらあら如斯に御座候。

大正十四年四月二日

市ヶ谷鐵窓窟

久太 閑人

大正十三年九月

監獄の鳩もへつたぞ秋の雲
 秋の蠅がまじまじ俺の顔を見る
 小便で顔うつしけり今朝の秋
 秋雨に濡らして見たき髯生えぬ
 秋の蝶に乾く病舎の布團哉
 長き夜や鼠が鳴けば鳩も鳴く
 下駄の音は新入りか知らず蟲の聲
 半紙など買ひたり菊の白ふ今日
 世の態は如何に窓外菊枯れぬ
 燼突の中ほど見へて秋の晴
 月も照らせこれも浮世の一世帯
 雑念に見る雲早し秋の風
 お隣りは轉房されて夜寒哉

十一月

浴み後のつかれ嬉しき小春哉
 座禪未だ芒が鼻を撫づ思ひ
 時雨來や麥飯の湯氣温かく
 喘み蓄めし小石を捨てん冬の風
 飛行機か湯の沸く音か冬の風

掃きよせし埃り彩ある小春かな
鳩塞し嗽ぎし後の髯の露

母を夢む

何憶ふ小春の様の媿かな

いつ頃なりしか、君の家の屋根に、夜な夜な

石の落ちし事ありしを思出でて（望月君）

月冴えて石降ることもあらざるか

十二月

霜且、雀が一羽落命て居る

誰が家の落葉か窓に飛んで来る

壁の血は南京虫か薄日影

壁見ても寒し血の沸く爪の跡

木枯の中に見供の聲が飛ぶ

雪だ雪だ雪だ茶碗の色も澄め

雪冴えや鴉が啼けば吠ゆる犬

大正十四年一月

初日影一尺ばかり漏れにけり

摒外の焚火の煙り懐つかしき

摒外や見えねど見ゆる焚火顔

憶ふかな焚火に映へし悲痛面

二月

樹は冬を眠むれど風の骸骨
迷ひ來し毳よ獄屋の庭の霜
飢え狂ふ態に吹雪の鴉かな
髯剃るや雪照り返す壁の前
あの霜が刺さつてゐるか痔の病

沸や見交はす樹には霜しづく

牢格子は月鐵窓は雪にこそ

多空や獄屋の笛のかすれがち

裁判所獨房にて——三句

冬日さす古き埃の匂ひかな

隣りでも手錠を鳴らす冬の壁

冬夕べ看守は干魚焼いてゐる

今日は紀元節とて好き日なりけり、食事の湯

に番茶の匂ふ好き日なりけり——二句

茶の湯氣に春の近づく日の出かな

澤庵もやや黄色なり春近み

冬雲や頼の皺の癖づきて

彼の男、終に我を折りて赤衣となり、小田原

の獄に行きぬ

小田原はさぞ千鳥の夜海の音
はし足れる布團に寝ねて眼糞かな

朝やけや風邪の泪に眼は滯れて

三 月

切る爪の芽生えの菊にこぼれけり
戀猫や枕を汚す毛の脂
きらりぼたり雫す春のおもみかな
長閑さが淋しすぎると鳴く鶏か
鶏の聲霞んで眼には癖の苔
病臥吟——二句

春の星うららに熱のよせくるや

堺氏より送られし本を開けば、観めこめあり

し香水の一時に邊りに漂ひて、病床の嬉しき

言はん方なし

思ひきや香水に酔ひ春の星

四 月

病餘、春日和を見かけて運動場に出る——二句

粥腹のひとしほうららふらかな

陽炎や欠伸の泪落てなほ

雑役君は長閑な男なり

間食が嬉しさうなり轉りに

轉や雀百態百々の聲

隣房の男、長の未決に倦み果てしとして、執行

者の送られ行く度びに太き吐息をもらしぬ

二三房送られたあとの霞かな

庭水の暮色や歸雁鳴かねども

馴れるといふことは、吾々にとつて必要なこ

ともあり、恐ろしい事でもある

外役の鎖の音も長閑にて

木鉢に土を盛りて一本の百合の芽を植えたる

が鐵窓の前に置かれたり——三句

昂然として百合の芽青きこと二寸

母の乳のやうに陽を吸ふ芽百合かな

一本の百合の芽に春を讃えけり

蝶々よどの窓見てもこんな顔

菊の根を分つ看守に守られけり

菊の根を分つよ我は屁と欠伸

布團を干しに庭芝に出て——三句

董、董、枯芝にてはなかりけり

夢包む布團ぞ董匂へかし

ひそみ笑ふ董の何を想へとや

扉を越えて手毬も来れば蝶もくる

蝶とぶや誰が雀に投げた飯

勞役の眼にけだるさの蝶々かな

夢見鳴く鳩かあらじか夜は朧

前庭空漠

五
月

淋しさが凝つて蒲公英の花一つ
醉生夢死
贈られし肌衣の香ふ春晝夢

鳴くは虻か孕み雀の羽根重み
春行くと孕み雀の吐息かな

望月君より生ま胡瓜とトマトを差入れられ

初夏の香氣、またなきものに嬉しく食しぬ

淡々と坐す日は嬉し胡瓜の香
金網の目をぬけて會ひに來た蠅ぞ

悼渡邊滿三君死

雲の峯に向ひ告別申すなり

公判に出て——三句

やあ君も髣落したか衣更
光る眼がぎつしりと五月曇りかな
久し振りに叫びましたよ若葉風
大蠅やほけたんぼぼの莖丹く
桐咲くや隣りも借りる糸と針
霧の降る驚きを桐の花澄めり
鼻かめば臭し榎に花咲いて
ぶつぶつと胃の鳴る午後や花榎

望月君の病を問ふ——二句

六
月

梅雨せまるこの空の下に臥てるか
うつらうつら根津の蚊を聞く夜はいかに
古田君を想ひつつ

桐の花の褪せ行く雨と眺めけり

窓にたたきの廊下あり。羽蟻群をなして

穴より出づ。忽ち雀飛び来る。慘又慘。

こぼれ散る羽根に羽蟻を悼みけり

折角髣を刺り落したれど

五月雨れて囚人髣がまた戀し

世の底の五月雨の底の黙座かな

蠅とぶや軒にうつらふ水の影

夢一縷なほ追ふや朝の暗き蚊に

伊串君病氣全快の報を受けて

跳ね狂ふ蚤も嬉しき且かな

ただ懶し

灯に狂ふ羽根抜け出し殻の身か

窓一つ五月雨空へ開きけり

五月雨や垢重りする獄の本

鳥か否か墨滴飛びし梅雨の天

袋貼る隣りの音や蠅閑に

いぶし銀を散らせし如く無数の

羽蟲の舞ひ出でければ

梅雨夕べ悲しみの色湧き出でぬ
濡れ寒むき梅雨草運ぶ雀あり
梅雨寒むく古足袋はいて味氣なし
空高き青葉に暮るる蝶白し
夏の蝶の白う消ゆとき俺も寝る
給水に朝の蚊浮ぶ曇りかな

獄窓易破夢——二句

愕然と夢の醒むれば大蛾かな
臭蟲の血の手虚空を掴みけん
奪刺つて書に青蜘蛛の這ふもよし

望月君より贈らるる新調の單衣に着替えて

朝涼に座すれば藍の香りけり
出廷の腹叩く朝の雲涼し

歸獄の自動車にて

編笠へ舞ひ込む夏の埃かな
さらば九合よ

桐覆しとどさみだる別れかな

新 房

蠅居ぬも何やら淋し青疊

此處は運動場の邊り綠樹多し——三句

青桐の影やすらかに揺れてゐる
衰弱を青桐の影の笑ふなる
梅雨の苔かすかに蒸す衰歩かな

發 熱——二句

五月闇見すゆる熱の慄えかな
灯取蟲熱の夢見る眼かな
熱の香にそろそろ蠅も來初めけり
のどの中へ藥塗るなり雲の峯
食べ餘すお粥にも蚊の御落命
死刑を求めらる

蓋れ蓋れ南京蟲の食ひかす
子規啼かす紫紺の夜明かな
夜動子の明けの眼や夏の露
分房に狂人は唄ふ雲の峯

七 月

窓は蚊のしろじろ淋し雨の音
蠅よ跳れ日影疊に伸びて來る
かくて住めば夏の西日も嬉しかり

窓に古蚊帳の框をはめて——二句

夕鴉笑ふな蚊帳の主じなり
窓蚊帳が孕むぞ娑婆の迷ひ風
明易き窓挿つ鳩を興じけり
今朝涼しころと落ちたる躰の垢

微 苦 笑

鶴脛を白扇をもて叩きけり
怒號する狂人暑く又戀し

病舎を望みて

亡き友の佛を松の落葉かな
迷悟子の味噌汁に蛾の落ちてける
窓の下を飯運ぶなり草いきれ
曉の蟬の聲一筋に想ふこと
窓蚊帳のものが憂く濡れし且かな
群鴉過ぐ

残灯に鴉亂るる雨涼し
暑くなりぬ襟番號も古くなりぬ

可哀痴呆

とぶ蠅を扇で打ちし歡喜かな

八

月

窓蚊帳にばつたのとまり露深し
露は樹のばつたは草の匂ひかな
しばし俺と遊べよばつた世の中は

日影の匂ひ

しんかんとしたりやな蚤のはねる音

未明大雷

獨り起きて雷雨の天を見入りけり
黒い蝶がふわふわと土用曇りかな

麥飯の蟲殖えにけり土用雲

獄の本を借りしに、表紙の文字も手垢にそみ

て消え、扉に鍛冶橋監獄の印ありしは、いと

珍らし

灯取蟲は語らぬ本の手垢の史
想ひ涼し小楊子噛めば杉の香の
ぢれ聲にまたも鳴き飛ぶ闇の蟬

望月福子さんより、小諸の父母の許に幼きを

連れてきしとて、萩、女郎花、などの草花五

六種、文も露げく封じ贈られければ

文とけば信濃の秋のこぼれけり
啼け歌へ蟬よ信濃は既に秋
この露の音信り來とてか朝の月

福子さんのことを

まこと君は信濃が原の秋女
心から信濃の露に濡らるるか
公ちやんの遊び載る姿を想ひつつ——二句

萩の花の露がこぼるる頬つべかな
近よれば逃ぐる蜻蛉を叱りけり
飯入るる穴に即ち夕すずみ

この日頃、窓近き檜の枝に黄色の豆粒ほどの

もの數多く生ず、花ならむか。

檜の花に露もけだるき寢覺かな

さて、固く黙々たる花よ!

朝霞の檜の木覺めたか眠てみるか
ほ、笑まんとすれど槍花のむくつけく

昨日よりの雨、夜に入つて更らに狂風を加ふ。

稻光頼り也。秋！最後の秋!!

永別の秋となり行く風雨かな
この窓をこの顔を照らせ稻光

彼の奇盗子、何處にか轉房せし

稻妻に照らされな壁を這ふ男

朝鮮大木香との手紙を見て——二句

人黙し瘦馬嘶く秋の天

鴉よりも人衰へて秋夕陽

雲愁々々

滿ち雲の穴二つ三つ秋の空

窓の下で、外役囚が蟬を手摺まへた

囚人に蟬捕はるるそれも秋

その囚人等の話し聲『おい蟬は油で揚げると

旨いさうだな』ハ、此の野郎、そのまま

でも食べたさうな面付きだぜ……』

徒言のふと悲うす秋の窓

九 月

運動場に出づ、朝風に梧桐の實頼りに飛落せり

燕行くや梧桐の實のはらはらと

運動場にて——二句

踏み鳴らす足下へ落つ一葉かな

一葉から眼を上げて豁つと歩みけり

秋風や浴槽に泛く鳩の羽根

秋雨や色には出でぬ槍の花の

さる人への音信の端に

朝の月に鳥渡るなり丈夫也

運動に出る

面白や蜻蛉日和を編笠で

さる未見の友より、何か身につけし品をとて

後ちの形見を望まる。人間、空彈のピストル

一つ位は撃つて見るべきものにこそ。苦笑

苦笑。

秋風や古禪も贈られず

然し、とにかく、茶色の更紗にて張りし名刺

入を贈る事にする。我が好みし露店の、憂き

品物也。

蟲の夜の露店を戀ひし我身かな

さて、其ほか御ン形見となるべき品々……

古下駄は地蟲が鳴いてくれるべし

蟲聴くや仁丹の舌水甘く

隣房の男曰く

酒の事は訊いてくれるな蟲今宵

列決日。無期ときまる。秋雨が降つてゐる。

秋雨を餞けらるる別れかな

舞りの自動車の窓から、これが見納めと東京

の街を眺めつつ

見納めの街は秋雨晝灯

さらば鳩よ朝寒顔をこちらむけ

あゝ古田君

冷やかな雨にいや澄む眼かも

窓外の景恨深し

刑場の樹立はあれか雨の虫

その日は壯快な秋晴れならむ事を……

その且鵬大晴れを祈りけり

我等五人は……

死に別れ生き別れつゝ飛ぶ雁か